

# ○△□そして。

吉田 茂

人間総合科学研究科教授

## ○の話：やはり地球は動かない

「それでも地球は回っている」これは、ガリレオの有名な言葉とされている。

さて、初々しい新入生を対象とした「体育心理学」の春初回の授業である。「地球が回っていると思う人は、手を上げて下さい」と問う。いぶかしげな顔ながらも、ほとんどの手が上がる。以前、地球の自転・公転を知らない子どもたちが多くと嘆く新聞記事があった。そこからみると、やはり大学生であるわいと、まずは安心する。

「では、なぜそう思うのですか」と畳みかける。「そう習いました」という返答が大方である。ここで例年がつかりするが、反面、にやりとする。「本当にそう思うのかい。では、君はどうやって確かめたのか」少し詰問調になる。「……」、「確かめられません」、「でも…」、反応は様々である。

「はい、困ってしまうのは当然ですね。では、今度は聞き方を変えて、地球が回って

いると『感じる』人は？」さすがにほとんど手を上げないが、たまに超人的な感覚の持ち主がいる。

「地球が動いたら大変だね。地震が来たら、皆、怖くてばたばたするじゃあないか」磐石としたゆるぎない大地の上で活動する人間にとっては、地球は動かないものである。運動するにはむしろ素朴で主観的な感じ方が重要なのであると力説し、知識と感覚の狭間に揺さぶりをかける。

これは、客観と主観の尺度、地球と大地の規模の尺度の違いの話への導入である。科学的推論による論理的知識体系と、感覚・認知的推論による知覚的常識体系は基準系が異なるが、ともに大切である。

「科学」というカッコイイ名称がもてはやされる昨今、ややもすると素朴な感覚をさげすむ傾向が強い。確かに感覚的因果推論は騙されやすいこともあるが、星の軌道が戻ることに端を発した天文学の再編成は



学生から贈られたサイコロ型ペン立て



挟みにくい竹の丸箸と黒豆

「美的感覚」から来たのではなかったろうか。主客が相補的に協調すべきである。

大学生には、多面的な価値観を受け容れる技量を期待している。「運動学習は実感的物理学の構築なのです。鵜呑みにせず確かめること、確かめ方を確かめることが大切です。私の話も嘘ばかりですから」

サイコロ爺は今日も呟き唄う。「やはり地球は動かない。サンラ〜イズ、サンセット」

### △の話：あなたの中の三角関係

3年生対象の「運動学習指導の心理」では、出席表を配り、「非利き手で署名して下さい」という。決まって、「エヘッ?!」というざわめきが起こる。「皆さんは、運動のエキスパートです。だからこそ、初心者に戻ってその気持ちを再認識して下さい」

「利き手は先生、非利き手は生徒、そしてあなた自身は仲人さんです。喧嘩したり、なだめたりしてください」この三角関係の体験を通して、学び方、教え方、研究の仕方を考えてほしいという願いである。

「食事のときも、非利き手で箸を使って下さい」食べたいという気持ちが注意転換を促し、手先や腕の力みを取り、ずっと美味しいものを口まで運んでくれる。右利きの人は身体の左側が軸になっているので、左手腕も固い。右側に重心を移してみると、左側全体が楽になり動かしやすくなる。

ペンの持ち方が固い学生も、非利き手から逆に教わったのであろう、利き手の自由度が大きくなっている。学期末に「箸の使い方を教えた経過」を書いてもらう。この時期には結構上達しているので、共に嬉しく丸い気持ちになる。

### □の話：見た目と中身

修士、博士の大学院では少人数なので、小物も登場させる。

「四角い板が2枚重ねてあります。よく見てください、下の板を掴んで全体を持ち上げて下さい。そのあと、上の板だけを持ち上げてみて下さい」「アレッ、重たい!」

今度は、上下を入れ替えてセットし、もう一度同じことをすると、「思ったより軽



心理学会（東北大）シンポの記念品



小さな豆も打出の小槌で大きくなる

く感じて、持ち上がりすぎた」

実は、初めは錘を仕込んだ板を上にしておいた。全体の重さを確かめ、「大きさが半分だから半分の力でと思ったら、レレッ、もっと重かった」となったのである。

見た目の情報への信頼が大きいということとは人間の特性である。運動指導でも、ビデオなど視覚教材が有用であり盛んに用いられているが、しかし、もっと中身の力量感覚や運動感覚の重要性を認識してほしい。

対面した子どもに右手を上げながら、「右手は？」というのと、同じ側の左手を上げてしまうことがある。子どもにとって、特に左右の視覚イメージの変換は難しい。解決法の一つは、ただ右手を出せばよい。不思議にずっと右手で握り振ってくれる。これだけで次からは元気よく右手が上がる。左右の基準は個人の身体にあり、運動と感覚を通して内部基準が定着したのである。

### 〇の話：ちっちゃくてでっかい豆粒

「これから回すものは、小さいけれどもとても大きな考え方が詰まっています」

体育学会（横浜国大）のあと、夕暮れの山下公園で風に吹かれていたら、「あなたの名前は どう書きますか、家族の名前は？」と変なおじさんから声をかけられた。不審に思いながらも名前を言うと、豆粒を右耳のところに持ち、筆をなめながら、すらすらと見ないで書いてしまった。驚いたことに打出の小槌も描いてある。

細かな書字は手が震えて書きにくく、フィードバック系制御ではなんととも御しがたい。おじさんはコツを教えてくださいなかつたが、豆粒を夕空に大きく投影して体全体で描いていたのだと思う。伸縮自在のイメージ利用と、フィードフォワード制御法による匠の技である。

バスケットボールのマイケル・ジョーダンリングを見ずにシュートを決めていたし、友人の目の不自由なお母さんが、暗がり針に糸を通し、上手に縫い上げるのも思い出した。「見ない」という感覚遮断法によって、外界を内界に取り込んでしまうことが、円滑な運動を誘導するのである。

（よしだ しげる／体育心理学）